

東儀秀樹

Togi Hideki

JAPONisme 特別対談

写真・岡本隆史
photographs by Takashi Okamoto



日本の「音」を語る

奈良時代より続く「楽家」の末裔として、雅楽の正統を受け継ぐいっぽう、他ジャンルとのコラボや舞台音楽制作など、あらゆるアプローチで音の世界を描く東儀秀樹氏と、箏曲家として、またジャポニスム振興会副会長として内外の文化興隆に尽くす大谷祥子本願寺裏方。

「音」を切り口にはじまった対談は、いっしょか日本人の感性、文化論、「生きる」ことの意味にまで広がり熱く盛り上がりました。ワクワクと胸おどるトークをお楽しみください。

Ohnami Shoko

大谷祥子

大谷祥子 (おおたに しょうこ)

箏曲家

東京芸術大学音楽学部邦楽科卒業。賢順記念全国コンクール1位。平成13年度文化庁インターンシップ研修生。平成25年度文化庁芸術祭新人賞受賞。古典邦楽のみならず、さまざまなジャンルのアーティストと共演、全国でコンサート活動を展開している。福井県あわら市にある吉崎御坊蓮如上人記念館館長、京都市「DO YOU KYOTO？」大使、ジャポニスム振興会副会長などを務める。

東儀秀樹 (とうぎ ひでき)

雅楽師

幼少期を海外で過ごし多ジャンルの音楽を吸収。高校卒業後、宮内庁楽部へ。宮中儀式などを勤めるいっぽう、雅楽器とシンセサイザー、ピアノなどのコラボ作品の創作にも着手。1996年デビューアルバム「東儀秀樹」で脚光を浴びて以降、次々とアルバムをリリース。舞台音楽やCM曲の制作、また俳優業ではNHK大河ドラマ「篤姫」で孝明天皇を演じるなど、独自の存在感と多彩ぶりで知られる。著書も多く、近著に『東儀家の子育て 才能があふれ出す35の理由』など。乗馬、クレー射撃はじめ並ならぬ趣味人としても異彩を放つ。

——海外での公演も多いおふたりですが、日本で演奏なさる時と、客席の反応、音の捉え方などに違いは感じられますか？

東儀 音の伝わり方、といったことでは、東西の違いはない、場所に関係はない、と僕の中では思っています。そもそも「雅楽」というのは2000年くらい前に大陸で生まれたもので、それが地球上で日本にだけ残っていて——、そういうところから「日本の伝統文化」と括られることが通常なんです。が、遡ってみればね、その頃の大陸、いわゆるシルクロードと呼ばれる辺りなんです、ここから西、こちらは東、

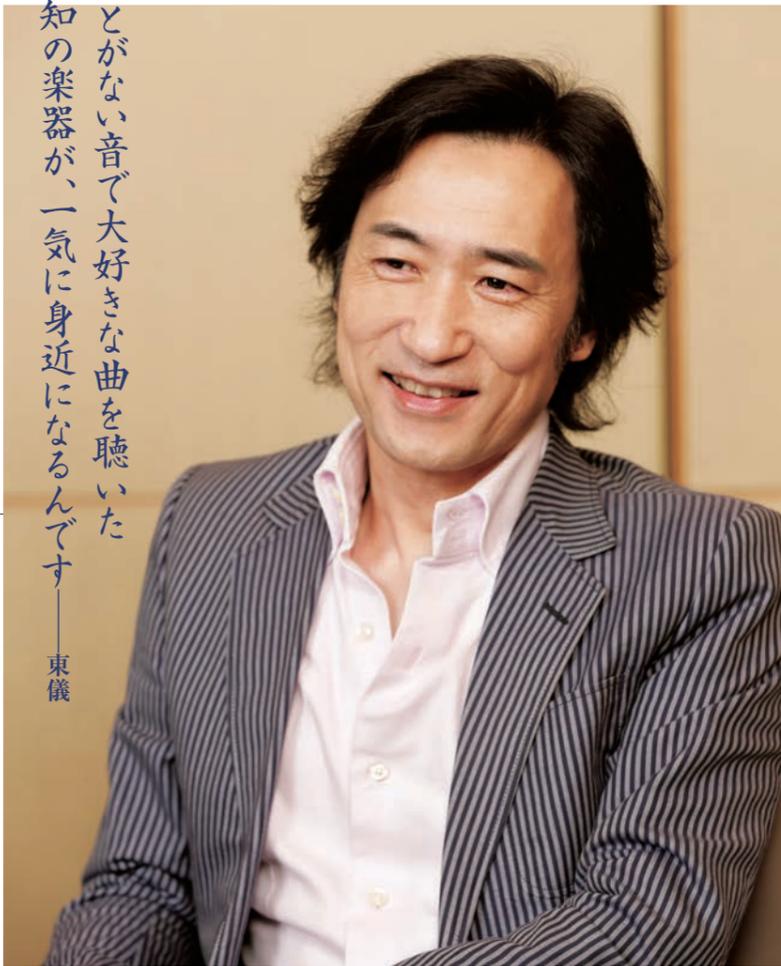
なんて分け隔てはないはずで、いろいろなものが行き交って。おそらくその頃に、

聞いたことがない音で大好きな曲を聴いた瞬間、未知の楽器が、一気に身近になるんです——東儀

西とか東とか、そういう感覚を超越した音楽をつくる人が——、いや人じゃないな、そういう「空気」があつたんでしょ。だから海外、国内を問わず、また古典であれ、新作であれ、聴いてくださった方からは「はじめて聴いたのに、なんでこんなに懐かしい気分になられるんだ」という感想が圧倒的に多いんです。

大谷 懐かしい気分、それはとても深く納得できますね。私も東儀さんの音の世界に心惹かれるひとりで。とくに「大河悠久」は大好きで、よくお琴で弾かせていただいていますよ。

東儀 そうですか！ それは嬉しいなあ。
大谷 これまで邦楽家との共演では、他の者の音を生かして、その中で自分の音を生



かすということを一にしています。もちろんそれも大事なことです。が、海外公演や洋楽器など異色の楽器とコラボする折には「自分の時空がつけられる」というの、うか、自由自在に動ける感じがしてワクワクします。

なぜ時空がつけられるのか、と考えるみると、それは「五線譜で表しきれない音」を表現するのを得手とする邦楽器の為せるわざなのかな、と。邦楽譜に何も記されていない「白い部分」にこそ、うれしみ、悲しみ、優しみなどすべての思いがつけられる、と私は日ごろ思っていて、弟子にも「弾くことより、音を出さないとこを大切に」とよく言うのですが。

JAPONisme 特別対談

東儀 ああ、よくわかります。僕は「行間を読む」という日本語が好きなんです。全部を表現し尽くす、というのは、時にカッコ悪いし、退屈でもある。あえて最少限に留め、「読み取ってくれよ」と受け手に託すことで、奥深くにある心をほのめかす。そこに美学があり、余白が知識欲を刺激もする。それは音楽も同じだし、お茶やいけばなの世界でも然り、でしょう。たとえばミニマムに生けた花に宇宙を見る。そういう感性はあらゆる日本文化に影響している。心の在り様で変化を楽しむ、というのかな。均一化されていないものに美を見出し、愛でる、これは日本の、とてもいいところですね。

心にワクワクの種を撒く 東儀流・雅楽レクチャー

大谷 日本にはこんなに素晴らしい文化や感性があるのに、多くの教育現場ではそれを伝え育むことが疎かになっているように思います。東儀さんは子どもたちに雅楽を指導される機会も多いかと思いますが、そのあたり、どうお考えでしょう？

東儀 今、学校教育が画一化されて日本

の感性や、子どもたちの個性が台なしにされている状況がありますね。それについてはもっと言いたいこともあります。が、雅楽や日本の音、感性を伝える、といったことに話を戻せば、どんな時代にあつても、人間のコアな部分はそんなに変わるものではない、とも僕は信じています。今は少し忘れかけている。けど、失ってはいない。それなら呼び覚ますために、上手く、くすぐればいいんじゃないかな。

大谷 くすぐる、ですか？

東儀 そうです。子どもを集めて「日本文化は大切ですよ」と口先で言ったところでどうしようもないでしょう。退屈して素通りしてしまうかもしれません。教科書に「雅楽」が載っていても若い世代に全然浸透していないのは、教え方がつまらないからです。いい教科書だとしてもそこに東儀秀樹の写真が載ってたりするんですが（笑）。でも案外、僕がポップなことやったり、テレビ番組に出ていたりして「あ、この人知ってる！」といったことが、興味を抱くきっかけになることもあるんですよ。入口のひとつとしてね。

たとえば僕が幼稚園の子たちに雅楽をレクチャーする時はまず、「どんな曲が好き？」と聞いて「アンパンマン〜！」となると、筆算でアンパンマンをパッと吹いちゃう。これまで耳にしたことのない音で自分の大好きな曲を聴いた時の「あ〜！」という瞬間。そこで一気に未知の楽器が身近になるんです。その後、「これ、実は

筆算といつて、とても古くからある楽器なんだけど、いつ頃からあると思う？」と聞く。「3年前〜！」なんて答える子がいる。「いや、もっと古いよ」というと、今度は恐竜好きの子なんか「1億年〜!!」（笑）。そういうコミュニケーションの中で子どもたちは、筆算↓古いもの↓日本にそれが今も残っている。といったことを心にしまってくれるわけです。その時に細かいディテールまで入っていかなくていいんです。その子たちが中学、高校生になり文化的な視点を持って筆算に接した時に「あの時の、あれだ！」と、筆算のアンパンマンの音色が鮮やかに甦り、新たな扉が開く。そういう過程が大事なんです。ただ、発信

子どもたちには、誇りを持てる日本文化を身につけてあげたいと思っています——大谷



する者の責任として忘れてはいけないのは、求めてくれたらいつでも本物の雅楽を提供するからね、という揺るぎない素地をもっておくこと。古典はできないけど、これで勘弁ね、というアンパンマンなら聴かせてはいけない。

大谷 指導者には、古典を習得した上で子ども向けの自由な発想が必要ですね。東儀さんのアンパンマンを聴いた子たちはとても幸せだと思います。

東儀 巷では東京オリエンティックに向けて、皆が英語を話せるように、なんて方針を立てたりもしているようですが、それ、ちょっと恥づかしいですか？ そんなことよ自分たちの国の文化に誇りを持つこと

この瞬間を、精一杯に。 原動力は「苦」より「楽」!

大谷 東儀さんのお話を伺っていると、仏教用語の「方便」つまりお釈迦さまが真理を伝えるために、受け入れられやすいあの手この手をお使いになった……というお話が思い浮かぶのですが、ご自身では、そういう意識はおありですか？

由緒あるお家柄の楽師でありながら、俳優業もなされれば絵もお描きになる、新しい音楽もおつくりになる。それらを通してお



もとは案山子の仲間!? ししおどし

カッコーン、と響く独特の音で静寂を際立たせる「ししおどし」。今では日本庭園の付きもの、風流の代名詞……といった印象で見られるこの装置ですが、もともとは田畑を荒らす鳥獣を威嚇するためのもの。鳴子や案山子など同じはたらきをする、いわば農具のひとつで、考案者は奈良時代から平安時代初期にかけての高僧、玄奘僧都であるとも言われています。

桓武天皇の病氣平癒祈願を行うなど、朝廷に重んじられる身分ながら、それを厭って隠遁。破れ衣で方々を行脚しつつ、収穫近い田畑では自ら鳥や獣を追い払い農民を手助けしたという玄奘さん。そんな言い伝えから、案山子のことを親しみと敬意を込めて「げんびんそうず」と呼ぶようにもなったとか。その玄奘僧都が、竹筒と田に引き入れる水を利用し「音」で鳥や獣を威すべく工夫を凝らしたのが「ししおどし」、というわけです。よって漢字をあてるなら「鹿威し」(猪威しとも)。いずれにせよ、日本の田畑にライオンは出ないので「獅子」ではありませんね。

「ししおどし」は「添水(そすい)」とも呼ばれますが、これに「僧都」の文字をあてることもあるのも、玄奘僧都の遺徳を偲んでのことかもしれません。

音・つれづれ 知ると楽しい! ちょこっとコラム

地中から妙なる調べ 水琴窟

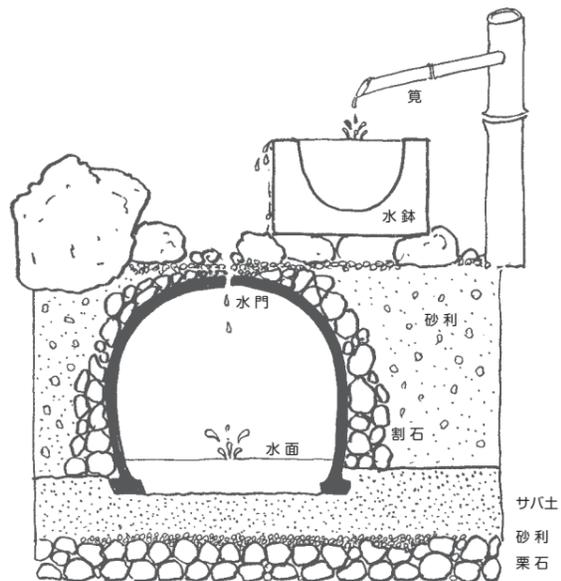
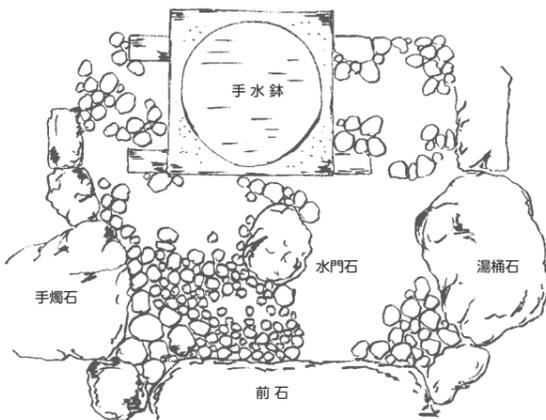
昨今、癒しの音とも言われ、ちょっとしたブームにもなっている「水琴窟」。土や砂利の上から水を流すと、地中から、カラでもコロでもない、文字にし難い澄んだ音が響いてくるのは、とってもミステリアスですね。

もちろんこれは自然現象ではなく、種も仕掛けもあつてのこと。土の中に、水の通り道分の穴を開けた大きな甕を伏せて埋めてあり、地面にしみ込んだ水が甕の空洞の中へ落ちてゆくようにしてあるのです。すると、甕の中で水滴の音が反響し不思議な響きが生まれる、という仕組み。下に溜まった水の量によって微妙に音が変わるので、どんな音がするかは折々のお楽しみ。つねに反響の具合が良いようにと、甕の中の水量を調節するパイパス、をしつらえたものもあるようです。

この水琴窟の原型は、江戸時代初期の大名茶人、小堀遠州が若い時に考案したと伝わる「洞水門(とうすいもん)」に遡ると言われます。今のような蛇口付きの洗面所などない時代、手を清める「蹲踞(つくばい)」や「手水(ちようず)」の水は、そのまま土の上へ捨てられていましたが、茶事や句会で数人が使うとすぐ水溜まりができてしまう。それを解消すべく、風情ある「音」を添える工夫が、さすがは稀代の茶人。その「洞水門」がいつの頃から「水琴窟」と呼ばれるようになったのかは不明ですが、「水の琴」とは言い得て妙。先人たちの技や美意識に、感心するばかりです。



篠山市立 武家屋敷 安間家史料館・丹波水琴窟



伝えになりたい「真なるもの」とは……? と興味を湧かせておられます。

東儀 確かに僕は役者をやったり、カーレースに出たり、テレビのパラエティ番組で冗談言ったりもしていますが、それは別に「雅楽」を伝えようとする手段ではなくて、単に、やりたいからやっつる(笑)。ただ、結果的にそのことで「雅楽」が伝わりやすくなっている、ということはありますね。

ちょっと話が大きくなっちゃうんですが、地球規模で考えると、人類にとって音楽を伝えようとか、雅楽を……とか、些細なことですよ。それより僕はいつも「人が生きる」ってどういうことだろうと考えていて……。人って、生まれてから死ぬまで、人間らしく精一杯生きてほしいと、神なり、仏なり、創造主と言いつてもいいですが、とにかく大きいものは、そう願っている

と思うんです。だから、できる限りのことを楽しんで「ああ、楽しかったあ」と最期を迎えるのが一番いい人生じゃないかな、って。僕、25歳の時に大きな痛になつて余命も宣告されたんですが、その時も怖いとか悔しいといった思いは全くありませんでした。それなら一日、一日正々堂々と、ワクワクと生きていけば気持ちがいいぞ、と自然に思えてきて。そんなふうに興味の赴くほう、楽しいほうに心を向けているうちに数値が下がって現在に至ります。その時、「苦」に心を向けていたら、今はなかつたかもしれない。だから言えるんだけど、無理して苦行しなさい、なんて誰も言っていないと思うんですよ。

大谷 仏さんに対して「こんなに苦しんでるんだ、助けてくれ、救ってくれ」とするのではなく、残された時間を大切に扱って、周りの方々に感謝する心を養うのが仏の教えです。それを自然に体得されているんですね。

東儀 深刻になつて苦しむ道を選んだところで、達観できるかと言えば僕はずいぶんと思つて。それなら楽観的に。そんな僕の姿を見て誰かが「あの人、雅楽師なのいろいろやっつて楽しそうだね。自分も何かやってみようか」なんて思ってもらえたら、それこそ本望です。

JAPONisme 特別対談

大谷 東儀さんには確固たる生き方のスタンス、いわば東儀さんの真理があつて、それを伝えるための手段、方便のひとつが雅楽、というふうにも思えてきました。

東儀 今、この瞬間、僕は雅楽師だけど、たとえばここからの帰り、どんな出来事に遭遇して価値感が変わり、何かべつと道へヒュッと翻る可能性だつてある。そんなふうにはフレキシブルでいるほうが、ずっと発展性があると、常に思っています。

大谷 「執着」を離れていらつしやるんですね。そして、何事をも受け入れる「覚悟」がありがたい。今の時代、情報に溢れていて、皆さん「知識」は身につけておられるけれど、それを信じますか、と問われると「信じてはいない」と言う。また「人事を尽くして天命を待つ」という言葉がありますが、皆、努力して人事は尽くしますが、天命を待つ覚悟はないのです。斯く言う私も、迷い多い人間ではありますが、リンパ癌を患い治療を受けたり、その後の人生経験を通して「信じる」心を育てていただき、未来を受け入れる「覚悟」、心構えを持つことができたように思います。大事なものは、本やスマホで得た知識を総動員して正否を論じるのではなく、夫婦でも親子でも恋人どうしでも、相手を大きく信じる。すると心が安定するし、日々を

しっかりと充実させ味わうこともできる。そんなふうに見える大人たちを見て「大人になるのもいいな、楽しそうだな」と思う子どもたちが増えるように、心を助長するお手伝いができたらいいなあと思うんです。

あら! たくさんお喋りしちゃった(笑)。本当はまだ、雅楽に由来の「序・破・急」へのご見解なども、お聞きしてみたいと思っていたのに、楽しい時間はすぐ過ぎてしまつて……。

東儀 本当に、あつという間でした。では、その話題は次にお会いする時の楽しみに。

大谷 ええ、楽しみにしております。

